

文苑

九州への旅の断片

蠶十二 若 林 生

(九州帝國大學に開かれた諸學界へ出席の日記である)
第一夜

我儘で、古狸で學校でも持て餘され者の三人、殊勝にも學術講演會を聞かふと云ふ、先到的のある旅に出たのが十月十五日の夜、而かも秋雨の靜かに濡れる夜だつた。嫉捨の高見から雨の中に明滅する善光寺平一圓の灯を眺めて、中で一番からくたのWが

おい、KさんYさん、あれが俺の半生を育んだ町の灯だぜ。あの灯の下に俺の少年の日の夢、青年の日の生活の大部分が展げられて來たんだぜ。わづか十日の旅として離れるだけで、うつすらしした淋しさが感じられるなあ」と、中嶋茂君の言葉借りればみつしりした述懐を展げ

て笑はれる。Wは善光寺平の一角の小さな町から通つて居る男である。

とにかく眠つたのか何か、暑くて堪らない。車室の中にはスチームが通つて居るのだ。木會は寒いぜ、とても寒いぜ」とKに嚇かされて着込んで來た毛のシャツも脱がねばならない始末だ。

第二日

第一夜は車中に明けた。嘗つて見たモントクリストの映畫を眞似てか「第一夜」と、自分自身に呼び掛ける様にYが云ふ。木會の谷には、深い霧が立ちこめて、模糊とした草木がまるで墨繪を見る様だ。御大典記念博覽會とかで夜明と共に汽車は混み合つて、千種までは文字通り立錐の餘地がない位。わづかに見る窓外には、信州では桑の伸びが悪くて晩秋蠶どころか、秋蠶さへも満足に飼へない慘狀に引き換え、此處名古屋附近は十月も既に中旬だと云ふのに魯桑系の水々しい葉が茂つて、まだ摘みたての葉柄が條に残つて居るのが羨しい。

名古屋へ着いて相當時間がある、Kはトランクを台にしてしきりに手紙を書きはじめる。
「おいKさん もう手紙か」

「ア、ハ、ハ……」Kは他愛もなく笑つて居る、同行三人兎に角妻帯者はKのみである。

卒業後母校養蠶部の一隅に沈澱しはじめて以來既にKは六度、YとWは四度の夏を送り迎へたにも拘らず、嘗つて一回もこうして伴に旅を続ける機会を與へられない不遇を叩つて居た者達だつた。今其の機會が與へられたのだ、學術講演を聞く事の楽しみよりも伴に旅をするその事の喜びに、それと汽車は急行だつたので小さな驛をパスする時の痛快さに子供の様に幸福だつた。とりとめない談話が續く。伊吹を右に仰いで近江の湖の岸を車窓に送迎する様になるに連れてYのカメラマンとしての藝術心が動き出したらしく、しきりにカメラをひねくり出した。勿論今秋の代議員會に際して開催される筈の甘茶展覽會に出品する爲めの材料の仕込みだ。が汽車が速くて思ふ様にレンズに入らないらしい。遂々我を折つて「いゝ畫題は手近の至る所に轉がつて居るものだよ。唯俺達の誠意が足りないからなんだ。何も旅行に出てまで撮らないつて、上田附近だけで無數にある筈だ。旅行の時はほんの紀念撮影だけでいいんだらうちやないか」とそして學校への寄せ書きに「汽車が俺達の意志とは反對

に速過ぎて、キヤメリスト凶年の形だ」と。Yの負けおしみの強さに就いてKとWはまた改めて感心させられる。

歌に名高い須磨、明石の海岸を過ぎる、形の面白い松と穏やかな波、淡路嶋を背景にして夢の様な眞帆片帆を浮かべた一つの風景、あるものは唯女性的な靜かな氣持だけだ。三人とも信州に生れ信州に育つた人間ばかりである。先づ上田だけでも考へて見て下さい。東に淺間、四阿、一段下つて烏帽子、南に蓼科、西には冠着と虚空藏の間遙かに日本アルプスの峻峰を眺めて、飛ぶ鶯の翅もたゆたうと歌はれた高原の寒風に揉まれて來た人間ばかりが、こんなに靜かな景色を目に迎へて、今何とも云はれないなごやかな氣持に引き入れられて行くのみだつた。あれが軋越、あそこを義經が攻め下りたと云はれて居るんやと説明して呉れた親切な男がある。

やがて岡山市も近づき名も知らぬ大きな川の對岸の柳やアカシアの茂みに漢々と夕靄の降りる頃、この無鐵砲な三人の胸にも云ひ知れぬ旅愁が轟々と迫つて來た。まだWが尋常小學校へも行かない當時、彼の町には電燈が引かれなかつた。家人がランプの掃除を初めやうと云ふ燈ともし頃になると、小さな胸は譯もなく淋しく悲しく

て土藏の白壁の下に獨りぼんやり佇むで居るのを見付けられて抱いて呉れる母の襟元にぼたぼたと涙を落した少年時代の姿を思ひ浮べて、二十有幾才のがらくた者が、甘いぞ甘いぞと流石に微苦笑を禁じ得なかつた。

今更斷る迄もなくYとWは豫定と云ふ物を立てた事のない、行きあたりばつたりを標語として居る勇敢な男だ。誘はれるまゝにKの義兄のお宅に御厄介になる。

第三日

Kの義姉の方に案内して戴いて、岡山城、後樂園を見物する、ここでもYの所謂記念撮影をやる。歸つて現象して見たが勿論、それは幽靈の如き藝術寫眞ではあつたが。

十一時幾分かの急行に乗る。處がこの際大變な失態をして仕舞つたと云ふのは、Yが乗車券を紛失して仕舞つたらしい事だつた。財布の中は勿論、ポケットと云ふポケットト全部を調べてもない。果てはトランクの中まで掻き廻して見てもない。時間は容赦なく迫る、狼狽して探ねるから同じものを何度も引き繰り返して居る。何故そんなに狼狽するんだと仰言るのですかつて、事實を白狀すれば、事實切符がないとすれば、三人の今後の財政の

前途に暗い影を投げる事になるのです。KもWもそろそろ吃驚しやうかと思ひ、Y自身は勿論青くならうかと考へ掛けた頃、一寸した紙片の折目からひよつこりコンクリートの上に跳び出した。ほつとしたYが、佐藤春雄を氣取つて「こ奴が、こ奴が」と、パツチンの様に再び思ひ切り切符をコンクリートの上に叩き付けて、狼狽して拾ひ上げた時と列車が構内に進入した時と同じだつた。三人は乗車した。

「○○幾行」こんな不愉快な成語が世の中にあるだらうか。乗車賃を澤山拂つた事を廣告する破廉恥な「名譽」をして一層光輝あるものたらしめるが爲めに、そして又その名譽心をして一層普通人から敬遠し目立たしめる爲めに、かかる人達には貨車を謹呈すると同時に、病氣の人と汽車に酔ふ人とはその同情すべき不名譽を象徴する爲めに、白と青とのマークのついた車室を投げ與へる事を吾々は提唱する。普通の健康な社會人の一人として、乗車賃を倍額拂つて貨車を謹呈される「名譽」を擔はなかつた代りには、クツションの軟かな車に投げ込まれて白と青とのマークを附せられる「不名譽」をも免れ得た事を無上の喜びとして三人は乗車した。北海道あた

りから來たらしい叔父、叔母、従兄弟達を福山に迎へて持ち切れない程の荷物と一所に呉に下車して行く人達や又、十七八才にもなるらしい美しい嬢を持つた銀杏返しの娘達四五人「あて連絡船に早う乗りたいのや」とか「小父さん満洲云ふたらどないにええとこやろなあ」などと、一見桂庵と知れる相の悪い四十からみの連れの男に話した、前途の暗い生活の何も知らずに無邪氣な小唄なぞ唄つて居るのや、兎に角、廣い廣い浮世のすがたを二間と十間の車室に仕切つて、而も何と皮肉な事には窓外にはても素晴らしい内海の夕影を覗かせて、昨日と同じ様に列車はばく進する。

驛構内の棧橋に一分の隙もなく密着した連絡船に乗り込んで間もなく、エンヂンの音と共に船は廻轉して門司へと向ふ。波動を起して進む船から、今別れて來た下關の街の電燈とその電燈が眞黒な水に映するのを眺めて、妙に神秘的な氣持に打たれる程の山猿で、三人の中Yは直江津から佐渡へ、Wはやはり越後の海で一哩ばかり離れた嶋に泳いだ事以外には絶對に平面的には本州の土を離れて見ないのを明言して居る男達だつた、だから「まるで洋行だね」とは異口同音に發せられた讃辭だつ

た。

第四日 門司着午後八時半、一泊、

既に三人の足跡は九州にその一步を印して居るのだ。昨夜うるさい宿引をまいて、宿引をしなければならぬのは、その宿がそれだけ貧弱な内容を暗示して居るのだと云ふ結論の下に、宿引のないはたごに泊つたのだつた。これは後に知つた事だつたが、九大の尾藤さんがこの三人を向へる爲めに箱崎にその夜出迎へて下さつたのだそうだが、此處でも亦行きあたりばつたりを發揮して、門司あたりに泊り込んで見事に尾藤さんに待ちぼけを喰はせて仕舞つたのだ。その謂の故にか、或は宿引のないだけの程度にまで上等の宿だつた故にか、夕飯朝飯も付かずほんの「宿借る」だけに三人は實に一人宛二圓五拾錢を計上されて吃驚して仕舞つた。

九時半、箱崎の驛に下車する。驛前に石の鳥居のあるのが箱崎八幡で、古の上皇の宸筆敵國降伏の額があるのが有名な社に拘らず、寂れた感じを與へる敷石の參道と石燈が立てられてあるのみ、拜殿らしいものも見當らない。がとに角參詣さへして置けば間違ひあるまいと思つ

て三人は頭を下げた。それにしても十時には講演が始まるのだ、路を尋ねるべく裏へ廻つて見て驚いた。社務所もあれば、立派な拜殿もある堂々たる、鳥居も聳えて居る表と思つたのは感違ひで三人こそ實は裏から參詣して居たのだ、期せずして失笑する。

「アツハハ……」その大きな聲に善男善女が振り返つてじろじろと見る、一人は柴山子のようなノツボ、一人は教授カバンを抱へた紳士、一人はトランクを洋傘に貫して肩にかついだ男。

「一休神と云ふものは裏から拜む位で丁度いゝんぢやないかなあ」そんな事を云ひながら大學につく。

九大農學部は福岡市の郊外松原の中に建てられた廣大な建物である、明るい感じを與へる、時間が迫つたので三人はそのまゝ動物學の講演會場に行く。

午前の講演が済んで場外に出た。長野の試験場の松村鶴田兩技手が三人を松野さんに紹介して下さる。

「蒲生君からの手紙で君達の來るのを知つて、待つて居たんだよ。それで君達の宿所をそれぞれ割り當てて置いた。Y君とW君は學校の蠶室の宿直室に泊つてくれ給へK君は尾藤君の所へ」

「ありがたうございます」と云ふ事になつたのだ。後でYとWとの會話の一節に「おい俺達の旅費の少い事を推察して居るんだぜ、松野さん仲々判りのいゝ人だなあ」

「本當だ、いろいろお世話になつて濟まないなあ」と午後の講演が済んでから、田中博士の蠶室で、松野さんからモザイック蠶やいろいろの標本を見せて貰つた。

はじめでお逢ひした人達だけでも福岡縣廳の藤さん、九州大學の松野さん、粕倉さん 熊本試験場の太田さん知つた顔では長野の松村さん、鶴田さん、福岡の中田さん京都の西山さん、九大の尾藤さん、小澤君、中會根君、九州としては珍らしく、同窓會員が集つたので懇親會を開く事になつた、信州よりも日没が二十分遅れると云ふその日没の頃、以上大學して御へ。會は大變な盛會だつたが、惜むらくは、講演に臨まれる筈の京大の八木さん小泉君が見えない事だ。ここの名物「水たき」と云ふ奴を初めて食つて見るのだが其の美味さと、それから三人は酒はそれ程いけない質だが食ふ事に掛けては決して人後に落ちない事を唯一の誇りとして居る連中だから、食つた食つた、實に食つた。」そりやそうさ。だから善光寺さんは安産の佛さまで、出雲の神社は縁結びの神さまだと

云つて居るぢやないか。信州へ歸つたらお札を送つてや

るよ」酌に出た女をとらへて、そんな事を云ひ出すのがある。誰れかの鉢巻きダンスが終つて、やがて木曾踊りでも踊り出さうと云ふ頃、皆して校長と、井上先生と、蒲生理事長に寄せ書きを始めた。水入らずの同窓生だけ何の遠慮もなく、會は徹頭徹尾盛會の裡に、かもしてつた。——かもすと云ふ字義に御質問の方は母校養蠶部宛御問ひ合せ下さい。——

そしてYとWとは、判りのいゝ松野さんの御好意に甘へて、海近い寄宿舎の、二階で、枕に通ふ松濤を物珍らしく聞きつゝ寢に就いた。

第五日 第六日

毎日偉い學者の顔と、六ヶ敷しいお話と、細密な表とばかりの連続。この間本校卒業生中講演されたのが動物學に京大の八木さん、小泉君、遺傳學會に長野の松村さん、京大の西山さん、學術協會に八木さん。

第七日

この日、またKとYとは例の本領を發揚して午前中の講演が濟むや否や、八木さんと連れ立つて、飛び立つ様に別府へ去つて了ふ。Wは午後のお話を聞いてからこれも

又ここを出發する。午後九時下關發特急に間に合ふ。

其の後

京都着が午前十時頃？ 直ちに小泉君の下宿に寢込みを襲つて以後三日、叡山に登つたり、大學を見たり、言葉の流暢さをなつかしんだり夜の京極を散歩したり、兎に角愉快に遊んだ。そして別府から内海を船で京都に着いたYを誘つてWは東京に向ふ。Kは加美さんの所に腰を下す。

かくして上田へ歸つたのが二十七日。兎に角、長い旅とは云はれないが、有意義な旅だつた事と、そして若しも學校の出張期間がもつと長く、出張旅費がもつと多かつたならば、より有意義な旅であり得たらう事を結論として筆をおく。

W — 若林茂一

K — 北澤周一 (編者附記)

Y — 山口定次郎